

妊娠と出生前検査の経験についてのアンケート調査 2013(3)

—超音波検査と NT 検査に対する妊婦の経験—

○ (独) 国立成育医療研究センター 井原千琴
静岡大学 白井千晶

1. 目的・方法

近年、妊婦にも知られるようになってきた Nuchal translucency(NT)検査 (後頸部浮腫測定検査) は、妊娠中の超音波検査の一種である。通常の超音波検査は、妊婦が「赤ちゃんに会える」検査として認識し、楽しみにしていることが報告されている (柘植・菅野・石黒 2009) が、NT 検査は通常の超音波検査とは基本的な考え方が異なり、胎児の形態異常の検出を目的としている。通常の妊婦健診中に偶然 NT の肥厚が認められることも多い。本報告では NT 検査における女性の経験について、通常の超音波検査との比較から考察する。そこでまず、通常の超音波検査を受けた女性の意識を 2003 年調査と 2013 年調査とで比較して変化や違いがみられるかを検討する。さらに 2013 年調査の結果から通常の超音波検査と NT 検査に対する女性の意識や評価の比較を行い、NT 検査が女性の妊娠経験の中にかに意味づけられているかについて検討する。なお、回答の自由記述についてはアフターコーディングして内容分析した。

2. 結果・結論

女性の超音波検査に対する見方は変化したか：超音波検査は回答者の大多数が受けており、受検頻度は妊婦健診の「ほぼ毎回」が半数を超えていた。超音波検査を受けたと回答した人の 9 割がその理由を自由記述で記入していたが、「受けるものだと思っていた」など受検が当たり前とする意見が多く、「胎児の健康状態などがわかるから」など、胎児の状態を知りたいとする意見が続いた。その他にリスクや危険性がないことに言及している人もいた。これらの理由は 2003 年調査の結果とほぼ同様であり、この 10 年間に超音波検査の実施については日本産科婦人科学会の見解と日本医師会のガイドラインが出されているが、その後も通常の超音波検査に対する考え方はほとんど変化がなかった。

NT 検査への意識は通常の超音波検査と異なるのか：NT 検査の受検率は 1 割未満だったことにくわえ、受けたかどうかわからない人が半数以上と最も多かった。NT 検査を受けた人の回答からは、通常の妊婦健診で特に尋ねられることもなく行われていることが多いことが読み取れた。NT 検査への評価は、通常の超音波検査について見られた「楽しみ」などの積極的な肯定的評価は見られず、NT 検査を受けることに対して慎重な意見を含む多様な意識があった。通常の超音波検査では、画像の見方や安全性について医師への説明を求めるものがあつた一方、NT 検査では胎児の異常に関する医師の説明を求め、さらに検査後のフォロー体制を求める記述があつた。また、NT 検査についての情報提供の必要性や検査を受ける際の妊婦の覚悟・納得などの必要があることも書かれていた。その他には、医師が確認した内容を妊婦に明確に伝えていないことへの不満もあつた。

さらに、NT 検査でダウン症の疑いがあると指摘されたことを、「異常が発見された」とする回答と「異常は発見されなかった」とする回答があつたことも興味深い。NT の肥厚が大きい状態を「異常形態像」などと表現することで間接的に羊水検査を勧める医療者がいる一方で、NT が厚いこと自体は異常でないと説明する医療者もいる。妊婦にとっては、「障害」の「不安」という認識であり、「異常」という用語を使用しない場合がある可能性が示唆された。このように検査の場面における妊婦と医療者の表現や認識の違いや、ソフトマーカーという概念がどのように妊婦に理解されているかについてはさらなる検討が必要である。

付記：本研究は、科学研究費助成事業 基盤 (B) (研究課題番号：25283017 研究代表者：柘植あづみ) の成果である。